

明治期の日本における桑木厳翼の認識論

満 原 健

【概要】明治末期の日本の哲学界では、ヴントの哲学が西田幾多郎を含め多くの哲学者に受容されていた。桑木厳翼がヴントの認識論を評価したのがそのきっかけだと考えられる。心理学を基礎とするヴントの哲学はすでにフォルケルトによって批判を受けていたにもかかわらず、桑木はヴントの哲学を支持していたのである。

桑木によれば、認識論は外界に対象が存在することを前提してはならない。言い換えると、認識論は直接経験から出発しなければならない。ただし、その直接経験は単に主観的なものではなく、そこには客観的要素が含まれていると理解されなければならない。その点で、ヴントの認識論は正しいのである。しかも、ヴントと異なり経験のうちに思考や一般妥当性、必然性という客観的要素が含まれていると理解することで、桑木はフォルケルトによる批判を回避することができている。そのため桑木にとって、ヴントの認識論が心理学を基礎としているという点は致命的な欠陥ではなく、むしろそれは、客観的要素が経験に含まれていると理解している点で高く評価されるべきものだったのである。桑木がヴントの認識論を支持したのは、それを改良することで問題点を克服できたと桑木が考えたからだと言える。

【キーワード】桑木厳翼、ヴント、認識論、明治

序

桑木厳翼は1920年に『哲学雑誌』に発表した「ヴントの思出」というエッセイ

で、「私は我が学界一般がヴントの影響を受け過ぎて居る点が多いと思っている」¹と述べている。確かに明治末期の1910年頃の日本の哲学界は、ヴントから一定の影響を受けていると言える。1907年にはヴントの認識論を紹介した淀野耀淳『認識論』が出版されているほか、1910年に発表された田辺元の最初の論文「措定判断に就いて」でもヴントにたびたび言及されており、1911年の西田幾多郎『善の研究』もヴントから強い影響を受けているからである²。

「我が学界一般がヴントの影響を受け過ぎて居る」と桑木が嘆くほどこの時期の日本にヴントの哲学が広まったさしあたりの要因は、当の桑木自身にあると考えられる。当時の日本国内で有力な認識論者だった桑木は、ヴントの哲学にはじめて支持を表明した日本人哲学者だった。西田や田辺は、その桑木の評価に影響を受けてヴントに接近したと推測できるのである。

ヴントは実験心理学研究室を世界ではじめて設立したため、心理学史でヴントに言及されることは今でも珍しくない³が、ヴントの哲学が有効なものとして参照されることは現代では稀となっている。ヴントを標的の一人としてフッサールが1900年出版の『論理学研究』第一巻で行った心理主義批判⁴が広く受け入れられたことを、その理由として挙げることができる。

桑木はそのフッサールによる批判と全く同じではないにしても、ヴントが心理主義として批判されていることを把握していた。それにもかかわらず、桑木はヴントの認識論を支持し、結果として日本の哲学界にヴントの哲学を広めることになったのである。ではなぜ、桑木はヴントの認識論を支持したのだろうか。本稿ではこの問いに答えることで、明治末期の日本の認識論にヴント哲学が幅広く受容された原因を明らかにしたい。

¹ 桑木厳翼『哲学大系及其他』、新生堂、1924年、249ページ。

² ヴントから西田へへの影響については、拙稿 Mitsuha Takeshi, “Nishida’s *An Inquiry into the Good* and Japanese and German Thought in the Late Nineteenth Century”, in *European Journal of Japanese Philosophy*, vol. 6, 2021 を参照されたい。

³ たとえば高橋滯子『心の科学史』（講談社、2016年）では、全四章中二章を割いて、ヴントの心理学への貢献が説明されている。

⁴ Edmund Husserl, *Husserliana XVIII: Logische Untersuchungen*, Den Haag 1975, S. 79-80, 131.

1 明治初期の日本への認識論の紹介

明治維新の頃に日本に紹介された認識論はデカルトからカントまでの近世哲学であり、その内容は、観念論と実在論、経験主義と合理主義という対立を経て超越論哲学へ、という図式で説明されていた。

日本にはじめて本格的に哲学を紹介したことで知られる西周は、オランダ留学中（1862-1865）に書かれたと想定される「開題門」で、デカルトやカントを含む哲学者に言及しているほか⁵、1873年に完成された原稿「生性発蘊」で、ベーコンやデカルトからカントまでの哲学をごく簡潔に説明している⁶。ただし、西周がこの近世哲学の認識論を自身の私塾でどれだけ教えていたかは不明である。

1877年に創立された東大では、翌年にフェノロサが教授に就任し、シュヴェーグラー『哲学史綱要』（Albert Schwegler, *Geschichte der Philosophie im Umriss*, 1848）をもとに、デカルトからヘーゲル、スペンサーの哲学を教えている⁷。観念論と実在論というそれまでの一面的な立場をカントが統一したというこの著作の説明⁸のとおり、フェノロサは近世哲学の認識論を講義したのだと考えられる。

1880年代には、近世哲学の認識論を紹介する哲学あるいは哲学史の概説書が出版されはじめる。そこでも、観念論と実在論あるいは経験主義と合理主義というそれまでの対立を、カントが調停したという解説が多く見られる。たとえば三宅雪嶺『哲学涓滴』（1889年）では、経験主義と合理主義の発展の果てにヒュームの懐疑主義に陥ったところ、「諸派の学理を熟考して、殊に完備せる哲学を興起した」⁹のがカントである、とされている。また中島力造『現今の哲学問題』（1900

⁵ 西周『西周全集』第1巻、宗高書房、1960年、19、615ページ。

⁶ 同上、32-33、618ページ。

⁷ 『東京大学法理文三学部年報』第7年報（明治11-12年）（東京大学、1879年）、67-68ページ。なお、『東京大学法理文三学部一覽』明治13・14年（丸家善七、出版年不詳、95-97ページ）には、シュヴェーグラー『哲学史綱要』の他、ルイス『哲学史列伝』（George Henry Lewes, *A Biographical History of Philosophy*, 1846）、ボーウェン『近代哲学—デカルトからショーペンハウアー、ハルトマンまで』（Francis Bowen, *Modern Philosophy from Descartes to Schopenhauer and Hartmann*, 1877）が哲学の講義の参考書として挙げられている。

⁸ Albert Schwegler, *Geschichte der Philosophie im Umriss*, 7. Auflage, Stuttgart, 1870, S. 154, 183-184.

⁹ 三宅雪嶺『哲学涓滴』、文海堂、1889年、143ページ。

年)では、カントの批判主義は経験主義と合理主義の調和を狙ったものと解説されている¹⁰。

日本で最も早く独自の認識論を提示した井上円了『哲学一夕話』第三編(1887年)も、この観念論と実在論、経験主義と合理主義という対立を踏まえて書かれている。この著作で円了はまず、外界すなわち物界についての経験を真理の標準の本とするもの、内界すなわち心界の思想を真理の標準の本とするもの、内外双方の世界の適合を本とするもの、物でも心でもない天神を本とするもの、と認識論の立場を四つ紹介している。そしてそのうえで、どの見方も一面的で、物界と心界は不可分、内界と外界は不可分、内外両界は物心の本体と不可分、天神の本体は物心と不可分であり、それぞれの立場は同じと考えるのが正しいと主張している¹¹。ここで外界を本とする立場は実在論、内界を本とする立場は観念論、物界についての経験を本とする立場は経験主義、心界の思想を本とする立場は合理主義に対応している。円了はこれらの立場の対立を、カントとは異なる方法で調停しようとしたのである。

2 心理学にもとづく認識論への注目

このように1880年代までの日本で紹介されていた認識論は、主に観念論と実在論、経験主義と合理主義という対立する立場と、それを克服したのものとしてのカントの立場だった。一方同時期のドイツでは、この近世哲学の立場の対立を引き継ぎつつも、それまでとは異なる認識論が登場していた。

1870年にはエルトマン(Johann Eduard Erdmann, 1805-1892)が、哲学の出発点と基礎を、自然科学を模範として事実の法則を見つけ出す新心理学に求めるベネケ(Friedrich Eduard Beneke, 1798-1854)の主張を、心理主義と呼んで非難しはじめている¹²。1897年にはユーパーヴェーク(Friedrich Ueberweg, 1826-1871)とハイ

¹⁰ 中島力造『現今の哲学問題』、普及舎、1900年、148ページ。

¹¹ 井上円了『井上円了選集』第一巻、東洋大学、1987年、68、81ページ。

¹² Johann Eduard Erdmann, *Grundriss der Geschichte der Philosophie*, zweiter und letzter Band, zweite Auflage, Berlin, 1870, S. 636.

ンツェ (Max Heinze, 1835-1909) も、ブレンターノやリップス、フッサールらの「すべての哲学的学問の基礎が心理学にあると考え、論理学や認識論でカント主義者と対立する立場」¹³を心理主義として批判している¹⁴。科学化した心理学に哲学の基礎を求めようとする心理主義と、それを批判する立場が、19世紀終わりのドイツで正当性を争っていたのである。

このドイツでの動向に日本で最も早く気づいていたのはおそらく、1887年から1892年まで東京大学で哲学を教えていたブッセである。この期間になされた講義や演習をもとにブッセが執筆した¹⁵著作『哲学と認識論』(Ludwig Busse, *Philosophie und Erkenntnistheorie*, 1894)では、存在するものとしての事実と妥当するものとしての真理というロツェによる区別を受け継いで、事実や存在と、原理や理性の真理が区別されている。すなわち、事実や存在は変化するものであり、すべて論理的に偶然なものである。一方、原理や理性の真理は、永遠で必然的なものである。永遠で必然的な原理は、変化する偶然的な存在の条件を定めるものであり、その意味で両者は関係している。しかし、原理や理性の真理から何かが存在するということを導出することはできない。同じく、存在する事実にもついで偶然的な自然法則を導出することはできても、必然的な原理や理性の真理を導出することはできない。その意味では両者は独立である。ブッセは、認識論を心理学に基礎づけようという試みは、この両者の相互独立性を誤認している、と非難しているのである¹⁶。

ブッセは東大での講義でもこのような主張をしていた可能性があるが、それに影響を受けた日本人は見当たらない。むしろ日本では、ブッセが批判対象としていたにもかかわらず、心理学に認識論の基礎を求める心理主義的な立場が目されていた。『国立国会図書館蔵書目録第一編：明治期』によれば、「認識論」という言葉を題に入れた書物は、井上円了が創立した哲学館の講義録として1899年と1901年に出版された松本文三郎『認識論提要』を除けば、明治期(1868-1912)に

¹³ Friedrich Ueberweg und Max Heinze, *Grundriss der Geschichte der Philosophie*, dritter Teil, zweiter Band, achte Auflage, Berlin, 1897, S. 274.

¹⁴ *Ibid.*, S. 274-277

¹⁵ Ludwig Busse, *Philosophie und Erkenntnistheorie*, Leipzig, 1894, S. IV.

¹⁶ *Ibid.*, S. 122-125, 133.

は、1898年のラッド『認識論』(George Trumbull Ladd, *Philosophy of Knowledge*, 1897, 中島力造抄訳)、ヴントの認識論を紹介している1907年出版の淀野耀淳『認識論』の二つしか出版されていない。この二つの著作はどちらも、ブッセが批判する心理主義的な性格をもっているのである。

ラッド『認識論』では、「認識問題は終始科学的心理学の結論を参考せずして、正当に之を叙述することは出来ぬ...認識問題攻究の出立点は、心理学でなければならぬ。認識問題の攻究は意識の現実的、具体的内容を分解的に説明することを以て之を始めねばならぬ。」¹⁷と主張されている。中島力造は「予がラッド教授の著述を選択せるは第一、同教授の認識論攻究の方法が予が採る所の方法と一致せるを以つてなり...書中説く所往々予の思考と大体に於いて一致」¹⁸と述べているため、認識論は心理学を参考にし、心理学から出発すべきというこのラッドの主張に同意していたと考えられる。しかしブッセからすれば、これは心理学が扱う事実から原理や理性の真理が独立していることを無視した心理主義的な主張である。

淀野耀淳はその『認識論』で、心理学に対する認識論の独自の領域を認めているので、ヴントは心理主義ではない、と主張している¹⁹。だが、淀野も「総ての認識は未だ象象と対象との区別を知らざる朴素的認識より始まる」²⁰と書いているように、ヴントは表象や概念の結合あるいは分解をする思惟の働きに先行する経験、すなわち直接経験から出発して、理性による理念の認識に至るまでの知の発生を説明することを認識論として捉えている²¹。淀野が説くヴントの認識論も、この点で心理主義的なのである。

3 明治期の桑木の認識論

¹⁷ ラッド『認識論』、中島力造抄訳、富山房、1898年、9-10ページ。

¹⁸ 同上、2ページ。

¹⁹ 淀野耀淳『認識論』、博文館、1907年、8-9ページ。

²⁰ 同上、77ページ。

²¹ Wilhelm Wundt, *System der Philosophie*, zweite Auflage, Leipzig, 1897, S. 30-31, 41-43, 85, 103-105.

3-1 新しい経験論

このように、1900年前後のドイツでは心理学に認識論の基礎があると主張する哲学者と、それを心理主義として批判する哲学者が対立していたが、明治後期の日本では、ブッセの反心理主義的な主張が受容されず、むしろ心理主義的な傾向をもつ著作が支持されていた。この心理主義をめぐる論争にわずかではあるが検討を加え、心理主義と批判される側の認識論を、特にヴントの認識論をはじめて明示的に擁護した日本人の哲学者が、桑木厳翼である。

桑木によれば、科学が前提をもつ学問であるのに対し、哲学という学問はなにも前提しない。ただし厳密には、哲学も完全に無前提なわけではない。自然哲学や人生哲学は、認識が可能ということ、主観的な認識作用が客観の対象に妥当し一致できるということを前提している。知識哲学すなわち認識論は、この認識の可能も前提とはしないが、あらゆる前提を排除しようとしても残る、自分が現在認識しているという事実、つまり直接経験は前提とせざるを得ない²²。

こう主張する桑木は、同じく経験を出発点とするさまざまな経験論の検討を進めていく。まず検討の対象となるのは、経験を外界からの影響で生じた感覚的印象と理解するものである。桑木によれば、ベーコンからロックを経てヒュームへと至る17-18世紀のイギリス経験論は、この感覚的印象としての経験を最も確実な認識の材料とする立場だった。すなわち、ベーコンは演繹に偏重した中世哲学に対して経験という材料の必要性を訴え、ロックは生得観念を否定し、経験を認識の最も確実な材料、認識の唯一の方法とみなした。彼らの経験論を継承したヒュームは、普遍的性質をもたない経験を認識の材料とした結果、科学のもつ必然性を否定する懐疑論に陥った²³。

19世紀のイギリスに生まれたミルやスペンサーの哲学も、ヒュームまでの経験論と根本においては変わらない。それに対して19世紀のドイツでは、イギリスのものとは異なる新しい経験論が登場していたと桑木は言う。その経験論とは、外

²² 桑木厳翼『哲学概論』、東京専門学校出版部、1900年、65-67、141ページ。

²³ 桑木厳翼「経験と経験論に就きて」(『哲学概論』、東京専門学校出版部、1900年)、466-468ページ。

界の対象についての感覚を経験とみなすのではなく、外界に対象物があるかどうかは確定せず、最も直接的な意識に現れるものを経験とみなす立場であり、経験を認識の材料ではなく認識の端緒として理解する立場である。この立場では、どのようにして認識は可能かというカント的な問題が、主観的意識内容としての経験から出発してどのようにして客観的な認識が生まれるかという問題として、探究されることとなる²⁴。

外界の対象の存在を前提せず、直接経験を出発点とする点で、桑木の認識論はこの新しい経験論と一致している。ただし、この新しい経験論にもさまざまな立場がある。桑木はその例として最初に、リープマンやランゲなどの新カント派の思想を継承しつつ科学との調和を図った、リールやアヴェナリウスなどの実証主義者、すなわち「主観に立脚して其の外に出ずるを拒む直接純粹の経験を重んずる論者」²⁵を挙げ、その哲学を批判している²⁶。

3-2 フォルケルトによる実証主義批判

桑木はリールやアヴェナリウスに対しては、フォルケルトを介して批判している。

フォルケルトは実証主義を、「純粹経験の認識原理を哲学の唯一の基礎とする試み」²⁷と理解している。ここでの純粹経験とは何か外的なものについての知という意味での経験ではなく、自分自身の意識過程についての直接的で内的な覚知という意味での経験のことであり、この経験はまさに自分の意識過程についての直接的な知なので、不可疑的で確実だけでなく、何かほかの知を根拠や前提としない絶対に自明なものという性格をもつ。そのため、これを無前提の学としての認識論の出発点とすることができる。このように考えて、自分の意識過程についての絶対に自明な知としての純粹経験のみを、認識論の基礎あるいは原理とする

²⁴ 同上、468-469 ページ。

²⁵ 桑木厳翼「常識と哲学」(『時代と哲学』、隆文館、1904年)、19 ページ。

²⁶ 同上、19-20 ページ、桑木厳翼「経験と経験論に就きて」(『哲学概論』、東京専門学校出版部、1900年)、470-471 ページ。

²⁷ Johannes Volkelt, *Erfahrung und Denken*, Hamburg und Leipzig, 1886, S. 104.

立場が、フォルケルトの理解する実証主義である²⁸。

純粹経験のみを基礎とし出発点とするこの実証主義は、ただちに難点を生む。経験を越えたもの、超主観的なものを排除せざるを得ないため、証明、一般妥当性、必然性、合法性などが存在することを正当化できないのだが、これらの存在を認めなければ、実証主義自身の正当化もできないのである。その結果、実証主義者は純粹経験の原理に反して、暗黙のうちにこれら経験を越えたもの、超主観的なものを導入してしまっているとフォルケルトは批判する²⁹。

フォルケルトによれば、実証主義者のうちで、純粹経験の原理を維持しようと最も努力しているのはヒュームとミルである。ヒュームは直接経験できる表象を越えるものはなにも現実的なものとして受け入れないという純粹経験の原理に従って、意識過程の連続性、因果性、魂という実体、不変の自我の存在を否認して、それらは想像力が作り出したものにすぎないと主張した。しかしヒュームは他の哲学者と同じく、推論や証明を用いている。それは、自分の他に多くの主観が存在することや、自分の証明が必然的な妥当性をもつということを、暗黙のうちに前提していたということを意味する。さらにヒュームは、現象のうちに規則性があるということを証明しようともしている。ここで経験を越えた新しい認識原理が導入されてしまっているのである³⁰。

ミルも一般妥当性や必然性などの超主観的な要素を秘密裏に前提している、とフォルケルトは非難している。ミルは、推論は一般的命題によって確実になり可能になると説明しているが、単なる経験からそのような一般的命題を獲得することはできない。また、ミルは一般的命題からの演繹についての考察をもとに自然法則や因果性という概念についても議論しているが、そこでも超主観的な補足が大量に行われている。ミルも、純粹経験が唯一の認識の源泉であるという立場を維持できていないのである³¹。

このように実証主義は一貫性を維持できない立場であることを指摘したフォル

²⁸ *Ibid.*, S. 53-55, 64-65.

²⁹ *Ibid.*, S. 45-46, 104-105.

³⁰ *Ibid.*, S. 106-109.

³¹ *Ibid.*, S. 110-111.

ケルトは、純粹経験とは異なる原理を導入すべきだと主張する。それは、論理的必然性の原理あるいは思考必然性の原理と呼ばれる³²。

フォルケルトによれば、意識過程には必然性という考えが結びついている表象結合がある。それは、事象自身の本性からして、このように結びつきはするが他のように結びつくことはありえないという意識が伴うような表象結合であり、事象が持っている意味が私を強制した結果生まれた表象結合であって、恣意的なものではなく、私個人から独立した、事象に即したものであるという。そのように、私の表象結合が事象のうちにある意味に依存していることを、フォルケルトは論理的必然性と呼ぶ³³。

私の意識のうちこの論理的必然性があるという考えは、超主観的なものの存在を直ちに正当化する。すなわち、私が論理的必然性の意識をともなう主張をするとき、そこには誰もが同意すべきという要求が含まれている。超主観的な一般妥当性の存在、私個人にとって超主観的な多くの他人の意識の存在が、そこですでに承認されているのである。しかしすべての認識主観が同意しなければならないということは、すべての認識主観が同一の法則に支配されていること、超主観的な合法則性が存在するということを含意している。さらに、論理的必然性の意識をもって私がたとえば「今太陽が照っている」と主張するとき、太陽が超主観的な対象として定立されている³⁴。フォルケルトの言う論理的必然性の原理は、このように意識過程が含む論理的必然性をもとに、一般妥当性などの超主観的なものの存在を正当化するのである。

以上のようにフォルケルトの考えでは、純粹経験の原理しか採用しない実証主義的な認識論は、超主観的なものを暗黙のうちに導入するしかなく、一貫性を失って破綻する。それを防ぐためには、実証主義を放棄して、純粹経験の原理に加えて論理的必然性の原理を採用しなければならない。フォルケルトはその論理的必然性の原理を、思考という言葉には論理的必然性という意味が含まれており、思考によって作られた結合には事象の本性からして他の結合はありえないという

³² *Ibid.*, S. 167.

³³ *Ibid.*, S. 139-141.

³⁴ *Ibid.*, S. 142-145.

意識が備わっているという理由で、思考必然性の原理とも呼ぶ³⁵。フォルケルトは経験のみを認識の源泉とする実証主義を批判して、経験と思考の双方を認識の源泉としてはじめて一貫性のある認識論が可能だと説いているのである。

桑木はこのようなフォルケルトの主張を「フォルケルトは此の説に基づき、終に認識には経験の他に思惟の必要なるを主張したり」³⁶と紹介しつつ、「此の思惟なるものが突然主観的過程に付加せらるるものとせば単に *Deus ex machina* たるの観を脱せず。是故に純粹経験は認識原理として不完全なりと云わんよりは、寧ろ抽象的概念にして実際には存することなしと云うを適當とすべからざるか」³⁷と疑問を呈している。フォルケルトは、実証主義の抱える問題を解決するために思考の原理を都合よく導入しており、どこから思考の原理が生じてきたのか、あるいはそもそもどこから思考が生じたのか明確にしていない。そのためフォルケルトの説も退けられるべきで、そもそも経験のうちに思考が含まれていると考えるべきだ、と桑木は批判するのである。この批判は、リールやアヴェナリウスに対してもあてはまる。桑木はリール、アヴェナリウス、フォルケルトの認識論を、経験についての理解が誤っているという理由で退けるのである。

3-3 フォルケルトによる心理主義批判とヴントの認識論

フォルケルトは、実証主義と同じように心理主義も批判している。すなわち、心理学を基礎とする認識論はただ意識の事実を記述し、比較、分割するという方法しかもっていないため、実証主義の認識論と同じく証明、一般妥当性、必然性、合法則性などが存在することを正当化することができない、一貫性を保てない立場でしかないフォルケルトは批判するのである。ヴントも、そのように批判される哲学者の一人である³⁸。

ヴントは確かに、心理学は哲学の準備をする学問だと主張している。ヴントによれば、経験にはそもそも主観的要素と客観的要素の双方が含まれている。自然

³⁵ *Ibid.*, S. 165.

³⁶ 桑木巖翼「常識と哲学」(『時代と哲学』、隆文館、1904年)、20ページ。

³⁷ 同上。

³⁸ Johannes Volkelt, *Erfahrung und Denken*, Hamburg und Leipzig, 1886, S. 44-46.

科学はそこから主観的要素を捨象して、客観を主観から独立したものとして扱う。それに対して心理学は抽象がなされる以前の経験、「思考機能のあらゆる働きかけに先行する経験」³⁹としての直接経験を扱う学問、客観を経験の主観と関連付けて考察する学問と規定できる。認識論などの哲学的探究は主客間の相互関係を考慮しなければならないため、この直接経験の学問としての心理学がその準備として必要だとヴントは主張するのである⁴⁰。

そのヴントは、認識論を知の発生を説明するものと規定し、認識に知覚認識、悟性認識、理性認識の三つの段階を設けている。その第一段階のはじめに置かれるのが、思考によって表象や概念が結合や分解される以前の経験としての直接経験である。この直接経験では主観と客観との区別もまだなされておらずむしろ両者は一致しているため、ここで与えられているものは主観的な表象でも客観でもなく表象客観であり、正しい認識が成立しているとされる⁴¹。

ただし、この知覚認識の段階でもさまざまなものの区別が発生するとヴントは言う。まず知覚の可変的な素材である感覚内容と知覚の不変の形式である時空が区別される。次に、性質の変化が時間的なもの、運動が時空間上の変化とみなされることで、時間と空間が区別される。また知覚する主観の運動のみが、その運動に伴う感情などをもっているということにもとづいて、主観とそのほかのものが、つまり主観と客観が区別される。以上のような、直接経験における表象客観の認識や、その表象客観を概念の助けなしに変形して得られた認識が、第一段階としての知覚認識に相当する⁴²。

次の悟性認識の段階では、複数の知覚あるいは表象が思考によって関係づけられ統一される。そのとき、複数のものを根拠と帰結という関係で結びつける根拠律にもとづいて、経験内容全体を矛盾なく連関させる仮説が形成され、その仮説にもとづいて、直接経験の内容が補完され修正されていく。そうして、知覚認識

³⁹ Wilhelm Wundt, *System der Philosophie*, zweite Auflage, Leipzig, 1897, S. 85.

⁴⁰ Wilhelm Wundt, *Grundriss der Psychologie*, Leipzig, 1896, S. 1-4, 19-20.

⁴¹ Wilhelm Wundt, *System der Philosophie*, zweite Auflage, Leipzig, 1897, S. 30-31, 89-90, 104.

⁴² *Ibid.*, S. 89-90, 111-113, 124- 130.

に基礎をもつ論理的分析によって、表象の内容や連関が改善されたり補完されたりしたときに得られる認識が、ヴントの言う悟性認識である⁴³。

さらにここで、その根拠律にもとづいて、経験内容全体の連関づけるにとどまらず、現実になされた経験の内容を越えていくことができる。その現実の経験内容を越えたものを認識するのが、理性認識の段階であるとヴントは述べている⁴⁴。以上のように、直接経験から出発して理性認識の発生までを説明するのがヴントの認識論である。

このようなヴントの認識論に対するフォルケルトの批判は、当たっていると判断できる。すなわち、根拠律という経験を越えたものは、直接経験に基礎をもつてはならず、直接経験から発生するわけでもない。そのことにヴントは触れることなく、根拠律がどこから発生したのか説明することもなく、これを悟性認識の段階で導入し、自身の認識論に組み込んでいる。純粹経験の原理のみを採用する実証主義が一貫性を維持できなかったのと同じく、直接経験からの知の発生の過程を説明しようとするヴントの認識論も、一貫性を保てていないと考えられるのである。心理学を基礎とする認識論は一貫性を欠くものになるという批判も、同様の理由で当たっていると考えられる。

フォルケルトからすれば、ヴントの認識論は実証主義の認識論と同じ欠陥を抱えたものであるため、退けられなければならないのである。

3-4 桑木の認識論とヴント認識論の擁護

桑木はフォルケルトがこのようにヴントを批判していることを認知している。しかし、ヴントの哲学をリールやアヴェナリウスなどの実証主義と同一視して退けることはせず、むしろ擁護している⁴⁵。

その理由の一つは、認識論にとって心理学は必要だと桑木が考えているところにある。桑木の考えでは、認識論は直接経験から出発して、知覚されたものが外界に存在すると考えられるのはなぜか、知覚されたものが錯覚であるとどのよう

⁴³ *Ibid.*, S. 155-159, 168-169.

⁴⁴ *Ibid.*, S. 180-181.

⁴⁵ 桑木巖賢『哲学綱要』、早稲田大学出版部、[1904年]、157ページ。

にすれば判定できるのかといった問題に答えなければならない。そのために必要となる認識作用の分析をする学問が心理学なのである。一方で桑木は、上述の問題に答えるには、精神状態だけでなく、精神状態と知覚対象との関係を研究し、その知覚が客観的に妥当と言えるのはなぜかということを明らかにする必要があると述べている。精神状態しか扱えない心理学のみではこの問題を解決することはできないため、認識論が心理学の一部である、あるいは認識論が全面的に心理学に依存するとは考えていないが、心理学は認識論の基礎として必要であり、ヴントのように心理学を認識論の準備とみなすのが正しいと桑木は主張するのである⁴⁶。

もう一つの理由として、「経験云わばその中に渾然として主観客観の両要素を含有せざるべからざる」⁴⁷ものと考えている点で、桑木とヴントが一致しているということを挙げることができる。フォルケルトにとって、無前提の学問としての認識論の出発点となりえるのは、絶対自明な私の意識過程である。それはあくまで私のものであり、主観的なものであって、そこに属していない一般妥当性や必然性などは超主観的なものとして理解される。そのため、フォルケルトはこの主観的な意識過程から出発してどのようにして超主観的なものが認識可能になるのかと問いを立て、純粹経験の原理のほかに思考必然性の原理を導入することで認識可能となる、という答えを提示している。それに対して、ヴントは知の発生の開始点に置かれる直接経験を主客両要素が含まれたものとして理解している。桑木はこの点を評価するのである。

もちろん、桑木の主張はヴントの認識論と全く同じではない。先に触れたように、桑木は経験には思考が含まれていると主張しているのに対し、ヴントは直接経験を思考が働く以前の経験と規定している。さらに、日常生活で同じ対象がさまざまに解釈されて経験されること、自然科学でも力や作用などの観察できない概念を用いて自然現象を説明しているということを根拠に、経験には悟性によって主観的なものが付け加えられている、それを排除すると経験は秩序も連関もな

⁴⁶ 桑木厳翼『哲学概論』、早稲田大学出版部、1900年、141-145ページ。

⁴⁷ 桑木厳翼「常識と哲学」(『時代と哲学』、隆文館、1904年)、22ページ。

いばらばらな知覚の集合体となり、もはや経験ではなくなると主張するカント主義者のリープマン (Otto Liebmann, 1840-1912)⁴⁸に同意して、桑木は「経験中に既に之を統一斉整すべき合理的要素」⁴⁹が含まれている、思考を欠いた純粹経験は「抽象的概念にして実際には存することなし」⁵⁰と主張している。経験中に含まれながらにして経験を統一整頓するこの合理的要素とは、フォルケルトの言う一般妥当性や必然性などのこと、思考の対象という意味での客観的要素のことを意味しており、ヴントが言うような外的感官の対象という意味での客観的要素のことを指しているわけではない。

このような桑木の経験理解は、ヴントに対して単に正しい経験理解を示しただけのものにはなっていないと考えることができる。桑木はフォルケルトの批判に対してヴントの認識論を擁護しているが、先に述べたように、ヴントがその批判を逃れられていると考えるのは難しい。ヴントは直接経験に客観的要素が含まれているとは主張しているが、その要素は一般妥当性や必然性などのことではない。そのためこの直接経験から一般妥当性や必然性を導出することはできないのだが、ヴントは知の発生の過程で根拠律を導入してしまっている。ヴントの認識論は、フォルケルトが批判するとおり一貫性を失っているのである。それに対して、桑木が主張するように経験に思考や一般妥当性、必然性がすでに含まれているのであれば、経験から一般妥当性や必然性を導出することは不可能ではないと考えられる。実証主義や心理主義を基礎とする認識論は一貫性を欠く認識論にしかならないというフォルケルトの批判は、桑木のように経験を理解すれば回避することが可能なのである。この点に、桑木の経験理解の意義を見出すことができる。

結

桑木は経験論を三つに分類している。主観的経験論、客観的経験論、批評的経験論である。ベーコンやヒュームらのように、経験を外界の対象についての感覚

⁴⁸ Otto Liebmann, *Die Klimax der Theorien*, Straßburg, 1884, S. 64-66, 69-71, 76.

⁴⁹ 桑木巖翼「常識と哲学」(『時代と哲学』、隆文館、1904年)、22ページ。

⁵⁰ 同上、20ページ。

と理解する経験論は、客観的经验論に分類される。無前提の学問としての認識論は、自分が今認識しているということ、つまり直接経験しか仮定できないと考える桑木からすれば、この客観的经验論は外界の存在を前提している点で誤りである。

直接経験しか認識論は仮定できない、認識論は直接経験から出発しなければならないと考える点で桑木と一致している立場が、桑木が主観的经验論と呼ぶリールやアヴェナリウスなどの実証主義である。しかしこの立場は、直接経験を単に主観的なものと理解している点で誤りであると桑木は言う。リールやアヴェナリウスらを批判しているフォルケルトも同じ過ちを犯していると判断されているため、この主観的经验論に分類されている。

ヴントの立場は批判的经验論とされている。これは、リープマンが受け継いでいるカントの批判哲学と同じく、経験を単に主観的なものではなく、客観的要素がそこに含まれていると理解しながら、カントの超越論主義とは異なり、経験を認識論に唯一許された前提とし出発点とする経験主義的な立場のことを指す。フォルケルトがヴントの認識論は心理学を基礎としており一貫性を維持できないと批判しているにもかかわらず、桑木はヴントの立場を支持し、ヴントと同じ立場であるこの批判的经验論を採用している⁵¹。

その最大の理由は、桑木のように経験のうちに思考や一般妥当性、必然性という客観的要素が含まれていると理解すれば、純粋経験の原理のみでは一貫性を維持できない、純粋経験の原理のほかに思考必然性の原理が必要とするフォルケルトの批判を回避できるということにあると考えられる。ヴントの認識論に対するフォルケルトの批判は当てはまっていると言える。だがその批判を回避する改良案を桑木は提示することができている。そのため桑木にとって、ヴントの認識論が心理主義的であるという点は大きな問題ではなく、むしろ経験が客観的要素を含んでいると理解されているという点で評価されるべきものだったのである。

⁵¹ 同上、13-22 ページ。

経験に思考が含まれているという桑木の考えは、『善の研究』での西田の思想と共通する。西田は桑木の議論に同意し、桑木の主張を引き継いだと予想することができる。しかしこの点を論じるには稿を改めなければならない。

凡例

旧送り仮名は現代送り仮名に直した。

参考文献

- 『東京大学法理文三学部一覧』明治13・14年、丸家善七、出版年不詳。
- 『東京大学法理文三学部年報』第7年報（明治11-12年）、東京大学、1879年。
- 『国立国会図書館蔵書目録第一編：明治期』、紀伊国屋書店、1994年。
- 井上円了『井上円了選集』第一巻、東洋大学、1987年。
- 桑木厳翼『哲学概論』、東京専門学校出版部、1900年。
- 『時代と哲学』、隆文館、1904年。
- 『哲学綱要』、早稲田大学出版部、[1904年]。
- 『哲学大系及其他』、新生堂、1924年。
- 高橋濤子『心の科学史』、講談社、2016年。
- 田辺元『田辺元全集』第一巻、筑摩書房、1963年。
- 中島力造『現今の哲学問題』、普及舎、1900年。
- 西周『西周全集』第1巻、宗高書房、1960年。
- 西田幾多郎『西田幾多郎全集』第一巻、岩波書店、2003年。
- 淀野耀淳『認識論』、博文館、1907年。
- 松本文三郎『認識論提要』、哲学館、1899、1901年。
- 三宅雪嶺『哲学涓滴』、文海堂、1889年。
- ラッド（中島力造抄訳）『認識論』、富山房、1898年。

Francis Bowen, *Modern Philosophy from Descartes to Schopenhauer and Hartmann*,
New York, 1877.

Ludwig Busse, *Philosophie und Erkenntnistheorie*, Leipzig, 1894.

Johann Eduard Erdmann, *Grundriss der Geschichte der Philosophie*,
zweiter und letzter Band, zweite Auflage, Berlin, 1870.

Edmund Husserl, *Husserliana XVIII: Logische Untersuchungen*, Den Haag 1975.

George Trumbull Ladd, *Philosophy of Knowledge*, New York, 1897.

George Henry Lewes, *A Biographical History of Philosophy*, London, 1846.

Otto Liebmann, *Die Klimax der Theorien*, Straßburg, 1884.

Albert Schwegler, *Geschichte der Philosophie im Umriss*, Stuttgart, 1848.

Friedrich Ueberweg und Max Heinze, *Grundriss der Geschichte der Philosophie*, dritter Teil,
zweiter Band, achte Auflage, Berlin, 1897.

Johannes Volkelt, *Erfahrung und Denken*, Hamburg und Leipzig, 1886.

Wilhelm Wundt, *System der Philosophie*, zweite Auflage, Leipzig, 1897.

———, *Grundriss der Psychologie*, Leipzig, 1896.

(みつはら たけし
奈良県立大学非常勤講師)